

# ウイメンズ ブックス

第39号  
1991年  
5月25日発行

## Women's Books

ウイメンズ ブックストア

発行所 有限会社 松 香 堂 書 店

602 京都市上京区下立売通西洞院西入る

TEL.FAX 075-441-6905

振替貯金口座 京都8-7950

——女性の本と女性の為の情報をお知らせするウイメンズブック友の会会報——

(入会金500円 年会費個人1,800円 団体2,200円)

## ウイメンズ ブック 目 録 (39)

このリストの書籍を御希望の方は、同封の振替用紙の通信欄でお申込み下さい。書籍代は送料共でお振込み下さいますようお願い致します。

ご注文の本の定価の合計額に、右の表の送料を合せてお送り下さい。なお、お電話でのご注文も受け付けています。

1,000円以下の場合	300円
1,001円～ 3,000円の場合	400円
3,001円～ 5,000円の場合	500円
5,001円～10,000円の場合	600円
10,001円以上の場合	700円

### 母なるもの (母親・母性・子産み)

(50音順)

〔あ・か行〕

『エロスなき母子癒着の病理』 山田和夫 大和出版  
1988年 1339円 (税込)

母子癒着の構図を解説。「父」不在が引き起こす家庭崩壊、母のようになりたくないという思春期やせ症の娘、家族の「業」を一身に具現した三島由起夫——祖母の「いけにえ」としてスタートした生。

『女・母と娘 シリーズ・いまを生きる⑤』 ユック舎  
1981年 979円 (税込)

母娘の関係を問直す。アンケートに見る「母と娘」。インタビュー 文化・母・子 (原ひろ子)、私の母性・母性愛考、産まない女にとっての母性、まんがに見る「母と娘」他。

『女』『母』それぞれの神話』 池田祥子 明石書店  
1990年 2060円 (税込)

自分の出産・子育てとウーマン・リブとの衝撃的な出会いを体験した著者が「子を産むこと」「育てること」からみえてくる〈女の思想〉〈母の思想〉を問う。

『女はなぜ子どもを産まないのか—出生率低下を考える』 「女の人権と性」実行委員会編 労働旬報社  
1991年4月 680円 (税込)

“1.57ショック”、出生率低下が発表されて以来、「産めよ、殖やせよ」との為政者のキャンペーンが行なわれるようになった。本書は女性の側からの出生率低下に関する緊急シンポジウム (90年10月) の記録である。産む・産まないは女の意味で決めること・丸本百合子 お年寄りが安心して暮らせる社会を・樋口恵子他、堂本暁子・ヤンソン由実子氏らの発言を収録。

『近代家族とフェミニズム』 落合恵美子 勁草書房  
1989年 3090円 (税込)

「お産と社会学とわたし」「出産の社会学における二つの近代」「近代家族における子どもの位置」などを収録したフェミニズムの論文。

『子別れのフォークロア』 本田和子 勁草書房  
1988年 1751円 (税込)

「子ども」とその周辺を研究テーマにしてきた著者が「母子」を主題にしたとき、「母子の絆」ではなく「母子の別れ」を書いてしまったという。伝承、歌舞伎、ブラウ管の中の母と子をテーマに「子別れ」を語る。山姥考、「北の国から」の場合、『山を走る女』と産むことの原因点。

〔さ・た行〕

『叫ぶ私』 森 瑠子 集英社文庫  
1988年 490円 (税込)

母親との葛藤、未娘の夜尿症の問題をかかえた著者はフェミニニストセラピー (河野貴代美氏) の門をたたいた。その実体験を小説化 (ドキュメント)。解説・河野貴代美。

『自我の彼方へ—近代を超えるフェミニズム 思想の海へ②』 加納実紀代編・解説 社会評論社  
1990年12月 2600円 (税込)

近代女性たちの思想アンソロジー。①自我の目覚め、②女権を超えて、③産む自由・産まない自由、④母性をめぐって、⑤母性とファシズム。晶子、らいてう、野枝、菊栄、窪川稲子、高良とみ等の論文・エッセイを収録。

『制度としての〈女〉—性・産・家族の比較社会史』  
荻野美穂, 田邊玲子, 姫岡とし子他 平凡社  
1990年 3300円(税込)

近代的制度としての〈女〉のありようを、身体、出産、性的役割をめぐる近代史の中から考察した女性像。近代産婦人科学と女性の身体イメージ—女の解剖学、18世紀ドイツにおける女性の〈淑徳〉と〈性〉—純潔の絶対主義他。

『性の儀礼—近世イギリスの産の風景』  
アングス・マクラレン 荻野美穂訳 人文書院  
1989年 2472円(税込)

近代初期のイギリスの男女は快楽と出産をむすびつけることによって、高い出産率を誇っていた。子どもが高く評価され、多産の処方箋が種々あった。また逆に避妊の戦略もあった。19世紀の劇的な出生率低下と墮胎禁止法など生殖の歴史を考察。興味深い性の歴史書である。

『女性と天皇制』 加納実紀代編 思想の科学社  
1979年 2060円(税込)

あの15年戦争において天皇と母たちは「大御心」と「母心」の虚構をともに支え合ったという点において、共犯者であるという加納論文は秀逸。

『ダブル・アイデンティティ 働く母親—イギリス101人の声』スー・シャープ 翻訳工房「とも」訳 創元社  
1986年 1648円(税込)

いまの日本の女性にとってもよき指針となるイギリス女性の声。

『父の国の母たち—女を軸にナチズムを読む(上)(下)』  
クローディア・クーンズ 姫岡とし子監訳  
翻訳工房「とも」訳 時事通信社  
1990年 各2500円(税込)

「女の領域」への囲い込みが女性の活動基盤を作り出す結果となり、ドイツ民族の再生のためには女の力が不可欠だという信念がナチズムへと女性を駆りたてた。一方、ナチズムは「母性」を礼賛。ナチズム研究に女性の視点をもたらした話題の書。

『つつる対談 多型倒錯』 上野千鶴子 宮迫千鶴  
創元社 1985年 1236円(税込)

両者が語る母親観が多く女性の共感を呼んだ。

## 〔は行〕

『働く女性の子育て論』 田中喜美子 新潮選書  
1988年 803円(税込)

現代社会は女性が子どもを産むことによって大きく損をする社会となっている。子育てを正常な軌道にのせよとするなら、母親を社会的に支える必要がある。子どもを通じて自己実現をはかるのではなく、自分自身を十全に生かす道を母親に与えるべきである。何よりも、男として夫が妻をまず支え、妻と正面から向き合う必要がある。

『働く母親たちが危ない』 バーバラ・J・バーグ  
片岡しのぶ, 金 利光訳 晶文社  
1988年 1957円(税込)

「父親であること、働いていることの2役をこなすに罪の意識を感じる男たちがいるだろうか? 給料取りであることは男性であることと一体なのだ。この2役にズレだの亀裂などはないのだ。それなら、なぜ女性だけがこんな苦しい気持ちに責められるのか?」という疑問に本書は迫る。キャリア同士の夫婦間の競争意識についても語られている。また、子どもに対して埋めあわせしすぎる働く母親のことも書かれている。

『母親!』 ルイ・シュヌヴィイ, エヴァ・マルゴリー  
浅井美智子他訳 朝日新聞社 1989年 2800円(税込)  
18歳から80歳まで870人のアメリカの母親が語る「母親とは?」。こんなぼう大な仕事をする著者たちのエネルギーに圧倒される。母性、その神話と現実 母親も変わる/母と子の関係/シングルマザー/働く母親と専業主婦。

『母親・父親・掟』 佐々木孝次 せりか書房  
1986年 2060円(税込)

日本人男性には「父親」が不在だ。人間には「母親」「父親」「幼児」の三種類があるが、「幼児」である「僕」は「父親」を発明できないで、「僕と母」の快の藪の中にいるという。

『母親モラトリアムの時代』 蘭 香代子 北大路書房  
1989年 2200円(税込)

臨床心理士が母親モラトリアム時代に提案する Co-セルフ(コ・セルフ)論。拡大された自己を獲得することが「母親になること」ではないかという。母親像の変遷、妊娠・出産により形づくられる 母親の心理、育児期の心理などを解説。

『母娘の風景』 松本侑壬子 論創社 1988年 1545円  
母娘の関係を各界で活動する母娘のインタビューを通して語る。桐島洋子&かれん 加藤ジツエ&タキ、津島佑子、丸岡秀子他。

『母という経験—自立から受容へ 少女文学を再読して』 宮迫千鶴 平凡社 1991年3月 2200円(税込)  
少女時代に読んだ物語を再読して、豊かな「精神的母性」と「社会的母性」のありようが温かなトーンで語られている。「親という役割」を生きた数年間は、私自身を自立と他者の存在を受容する能力(成熟)に向かう航海に押し出してくれたという。

『〈母と子〉の民俗史』 フランソワーズ 福井憲彦訳  
新評論 1983年 2266円(税込)  
子産み・子育てにまつわるフランスの農村社会の諺や慣習を手がかりにして、母と子の民間医療、民衆文化の歴史書。図版が多くて興味深い。

## 『母よ、おかあさんでなんだろう?!』

中山千夏, 岸田 秀他 中央法規出版  
1988年 1236円 (税込)

15人の著名人が「わたしにとっての母親像」を語る。中山千夏の語る母はこうだ。寺の婦人会の行事やら、市民運動のマネゴトみたいな活動やらで結構忙しい。母がせっかくなかち遂げた子離れを私は壊そうとは思わない。母がいわゆる「おかあさん」として生きようとしなかったことの成功であろう。岸田秀の母はこうだ。母の「献身的愛情」の重圧に苦しみ、母が死んだのちは母に「恩返し」をしなかった罪悪感に苦しんだ。

## 『不妊—いま何が行われているか』

レナード・クライン編 フィンレーズの会訳 晶文社  
1991年1月 2800円 (税込)

生殖技術の発展は急を告げている。技術はうまくいっていないのに、成功だと信じさせられ、女に敵対するものなのに、女のためだと言われる。不妊のひとつひとつに「奇跡の修理」をもたらす体外受精、代理母、生命操作などの最先端技術を体験した女性たちの証言。必読の書!

## 『平塚らいてう著作集2巻 母性の主張について』

編集委員会編 大月書店 1983年 3090円 (税込み)  
与謝野晶子と交された母性保護論争の発端となった発言を取録。エレン・ケイの思想との出会い。出産の体験による母性主義の確立。

## 『平安時代の母と子』

服藤早苗 中公新書

1991年1月 580円 (税込)

王朝時代の結婚、家族、子育て、子どもたちの生活を検証し、母子関係も時代によって変遷することを明確にしている。命をかけた出産/玉の輿のルート/乳母の成立/子連れ出勤/さまざまな結婚のかたち/等。「母性」を考える歴史的資料としても使える。

## 『母性とは何か』

青木やよい 金子書房

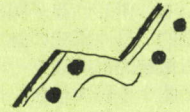
1986年 1854円 (税込)

現代のフェミニズムの重要テーマである「母性」の問題を対談によって語る。母性イデオロギー、女性原理、産む性からの解放など。丸本百合子、落合恵子、河合隼雄他。

## おんなの本・アフリカ

〔連載第3回〕

楠瀬佳子



## 『人は変わる』

アマ・アタ・アイドゥ 著

ガーナの女性作家アマ・アタ・アイドゥは、今年になって、14年ぶりに長編小説『人は変わる』を発表した。

これまで、アイドゥは、「子供を産んで、育てること」のみに女の価値を見いだす伝統的なアフリカ社会が、「子供を産まない」女、「子供が産めない」女に対して残酷なまでに品行な非難や攻撃のすさまじさを描き、女の唯一の生き方が結婚だけでないことを語ってきた。しかも、植民地時代から女の身体が凌辱されてきたというアフリカの歴史背景をふまえて、この問題を論じたのである。だから、アイドゥの作品からは、女が子供を産む道具として扱われてきたことに対する激しい怒りが読み取れるが、大変な勇気があることだった。アイドゥの主張は、伝統的な共同体を支えてきた母性神話を破壊する危険な要素を含んでいるとして、共同体から非難と冷笑を浴びせられたが、主体的に生きようとする女たちからは歓迎された。

例えば、避妊して子供を作らない妻は、夫の家族や閉鎖的な農村社会から罵倒を浴びせられ、疎外された。異なる価値観や世界観を受け入れない社会で、子供を産んで育てる自信はなく、いくら罵倒されようが、むしろ夫との対等平等な人間関係を築くことに精力をさこうとする。さらには、母性神話の呪縛から解放され、一人で生きることを選択した女の試練も大きい。「この世は甘くない」(アイドゥの短編のタイトル)のであるが、抑圧と束縛の不自由よりは、精神の自由さを選択したのである。いくら近代的、個人主義的な危険分子(=現代の魔女)であると呼ばれようとも。

さて、「ラブ・ストーリーは書かない」と断言してきたアイドゥが、『人は変わる』で初めてラブ・ストーリーを書いた。私はアイドゥのこの「心変わり」を大いに歓迎したい。人はどんどん変わっていいと私は思う。男社会の中で突っ張らなければやってこれなかった女たちが、男たちに自己主張することに疲れて、突

っ張るのをやめ、肩の力をすうっと抜いたときに、初めて自分の居心地のいい場所が発見できる。こんな変わりかたはすてきた。アイドゥの書き方はまさにそんなふうに変った。

だが、作家は自分が一度語った言葉にこだわる悲しい運命にある。アイドゥは「ラブ・ストーリーを書いた」いいわけをする。「ラブ・ストーリーを書けなかったのは、もっと差し迫った重要な問題があるからで、ラブ・ストーリーというのは、幾分か特権をもつ若い女性と作品に登場する人物との人生と愛の一片にすぎないからだ。私の作品がいかに現代的であろうとも、いかなる議論に貢献するつもりはない」といいながらも、作品『人は変わる』では都会で生きる現代女性のディレンマをうまく描いて、女たちにいち早くも話題を振りまいている。

夫の妻に対する強姦、女の自立への闘い、行動を束縛する嫉妬や伝統の問題を扱い、アイドゥは男たちの意識革命を計ろうとする。夫から妻への要求は、妻が仕事をやめること、もっとたくさん子供を産むこと、立派な妻になることであった。その結果、妻は窒息感を覚え、畏に捉えられた気がして、自分の気持ちを夫にわからせることができない苛立ちから精神傷害をきたす。こうしたズレ違いの夫婦の間に亀裂が入り、主人公は妻子ある新しい恋人を得て、性愛の充足感も得る。そして彼女は新しく生まれ変わる。だが皮肉にも仕事と性愛を確保するために、恋人の第二夫人となった彼女は、再び元の夫が仕掛けたのと同じ結婚という畏にはまることになる。

女にとって結婚は自立したライフスタイルを遂行できる保証には決してならなかったのである。誰もが「変わりたい」と望みながら、「変わる」ことの難しさを教えてくれる作品だった。

Ama Ata Aidoo; Changes, The Women's Press, 1991.

『母子癒着』 木村 栄, 馬場謙一 有斐閣  
1988年 1545円(税込)  
母親の自己愛の変形ともいえる「母子癒着」。母親自身が自己実現と開かれた人間関係を持つことが必要である。

『母性 ころろ・からだ・社会』  
繁多 進, 大日向雅美編 新曜社  
1988年 2575円(税込)

新しい時代に生きる女性たちの生活に即した「母性」の構築が急がれる。本書は医学・心理学・社会学・社会福祉・歴史学などの分野から「母性」観の現状と問題点を指摘。十代にみる「性」と「生」、子育ての中の母親の心理、共働き家庭における子育ての条件、母性はどこへ行くか他。

『母性の研究—その形成と変容の過程：伝統的母性観への反証』大日向雅美 川島書店 1988年 3914円(税込)  
本書の母性研究は従来の母性信仰への懐疑を出発点としている。新しい親子関係や父性の問題まで視座に入れた画期的な母性研究の論文を多数収録。第一部 日本における伝統的母性観とその問題点, 第二部 母性の発達変容に関する研究報告, 母親意識の世代差について, 母親の子どもに対する愛着, 第三部 父性をめぐる現状とその問題点, わが国における父権の特質および問題点他。

『母性を問う 上・下』 脇田晴子編著 人文書院  
1985年 各2060円(税込)  
母性観の変遷を歴史学・民俗学から体系的にまとめたもの。

### 〔その他〕

『ママハハ物語』 宮迫千鶴 ちくま文庫  
1990年 480円(税込)  
再婚の「同居」家族を生きる「ママハハ」体験を語る建設的な家族論。

『密室の母と子』 川名紀美 潮文庫 1984年 360円  
密着した母と息子の関係のゆがみをルポ。夫婦のセクシュアリティの不毛さと表裏一体となったマザコン。

『みんな悩んでママになる』 結木美砂江 汐文社  
1990年 1300円(税込)  
母親の本音を書いた育児書は少ない。母親になって悩んでいるのは自分だけでないことを知ってもらいたいと、著者は新米ママの悩める胸をめんめんと綴った当時の日記をもとにして書いた。「わいふ」に好評連載されたものに加筆。

『増補 良妻賢母主義の教育』 深谷昌志 黎明書房  
1990年 4120円(税込)  
良妻賢母主義の形成過程を分析した昭和40年の論文に加筆し、「良妻賢母」イデオロギーの意味と日本の女子教育の変遷をたどる新装版。

『私らしさで産む、産まない』青木やよひ 丸本百合子  
農文協 1991年4月 1250円(税込)  
出生率低下をどう考えるか? “産む、産まない”を主体的に考える手がかりを与えてくれる心強い一冊。女性の体と性を多角的に捉え、自分らしさで“産む、産まない”を選択することが大切であることを強調。いままぜ子どもが産みにくい? / 母性本能と母親の役割 / 人口政策の歴史 / 科学技術と女のからだ他。

『私をつつむ母なるもの—イメージ画にみる日本文化の心理』やまだようこ 有斐閣 1988年 4429円(税込)  
私と母の関係を女子学生に絵で描かせ、いろいろな母と娘の関係性を解説。

あも No. 5 「特集 働くお母さんと子どもたち—いま、フェミニズムの広がりのなかで」 メディカ出版  
1990年 1200円(税込)  
「フェミニズムは子どもを語れない?」「少年少女フェミニズムと日本社会の未熟さ」などとの発言が飛び出す江原由美子+宮迫千鶴+河合洋の座談会。「子持ち」と「子無し」の意識のちがいとライフスタイルの溝。「働くお母さんって誰?」という時代なのに…。働く母親はあたり前、その体験談エッセイ—本田和子, ますのきよし, 木下明美, 高橋幸子他。

『資料 戦後母性の行方』 鈴木尚子編集・解説  
ドメス出版 1985年 3605円(税込)  
戦後の母性保護をめぐる発言, 労働権, 性差別の問題をめぐる戦後の「母性」に関する資料を収録。

『資料 母性保護論争』 香内信子編集・解説  
ドメス出版 1984年 3605円(税込)  
晶子, らいてう, 菊栄, わか等によって展開された「論争」の基本文献を収録。

女性空間 No. 5 「特集 母性を考える」  
日仏女性資料センター 1988年 500円(税込)  
フランスの家族政策と「第3子」, 日仏「子育てアンケート調査」を終えて, フランス出産体験記他。

### 〔番外篇・絶版です。図書館でどうぞ〕

『母親業の再生産』 ナンシー・チヨドロウ著  
大塚光子, 大内管子訳 新曜社 1981年  
実際に母親になる以前から, 女性は母親業に適應するように幾世代にもわたって再生産されていくメカニズムを学問的に解明した本。母と娘の関係を本書を手がかりに考えてみたい本。

『母と娘の関係』 ナンシー・フライデー著  
俵 萌子, 河野貴代美訳 講談社  
新しい母と娘の関係を提言する問題の書。心に潜む“内なる母親”に支配される娘の性。

### 〔近刊予定〕

『母性という神話』 E・バダンテール 鈴木晶訳  
筑摩書房 1991年5月下旬 1900円(予価)  
「母性本能」幻想をくつがえした『プラスラプ』(絶版)の改題。新版序文書下ろし付。

—女性のための—

## 最新刊案内



—1991年2月～  
1991年4月及び  
第38号未掲載分—

## 〔からだ・性〕

『私らしさで産む、産まない』青木やよい、丸本百合子  
農文協 1991年4月 1250円(税込)

本号特集目録4頁に既出。

『女はなぜ子どもを産まないのか—出生率低下を考える—』  
「女の人権と性」実行委員会編 労働旬報社  
1991年4月680円(税込)

本号特集目録1頁に既出。

『出産ストライキ産めない理由、産まない理由』  
高野瀬順子著 山谷えり子監修 叢文社  
1991年4月 1000円(税込)

「1.57現象」の実態を探る237人の声。黒田あゆみ、加藤タキらの出産体験。第2子は出産ストライキ中の女性たちの産めない理由、産まない理由。

## 〔女性史・評伝〕

『平安時代の母と子—貴族と庶民の家族生活史』  
服藤早苗 中公新書 1991年1月 580円(税込)

本号特集目録3頁に既出。

『西洋中世の男と女』 阿部謹也 筑摩書房  
1991年1月 2270円(税込)

聖性の呪縛の下で、ヨーロッパ中世社会では男女関係を律する規則が多い。教会がなぜ、これほどまでに男女の性的関係のあり方に関心を抱いたのか？ 中世の男女問題のアウトラインを明らかにする。

『娼婦』 アラン・コルバン 杉村和子監訳 藤原書店  
1991年2月 7800円(税込)

19世紀の売春の歴史は、この時代を理解するための最適の道のひとつだった。「ブルジョワ社会」と「満されぬ性」を軸に19世紀の売春史を考察した力作。

『日本花街史』 明田鉄男 雄山閣  
1991年12月 15000円(税込)

600頁に及ぶ花街史。遊女の発生と花街の形成／近世京都花街の盛衰／全国遊里案内／遊女の生活／遊女の服飾／遊里の経済／資料篇。

『女性史研究入門』 歴史科学協議会編 三省堂  
1991年4月 2150円(税込)  
女性史研究の現在と課題を解説し、研究のヒントと資料を提供するハンドブック。参考文献、関係諸機関リスト付。

『女ユダたち—ドイツナチ時代の密告10の実話』  
ヘルガ・シューベルト著 小野聰子他訳 あむすく  
1991年4月 1850円(税込)  
旧東独の女性作家によるナチスドイツの女密告者たちのドキュメント。旧東独の密告社会、全体主義体制批判を暗に告発し、先に西側で発表されベストセラーになっている。平凡な女たちも「女ユダ」になり得る(?)。

## 〔女性論・フェミニズム〕

『フェミニズムの彼方—女性表現の深層』 水田宗子  
講談社 1991年3月 1900円  
1980年代の消費文化の時代を経て、女性は小説の書き手としても読み手としても、もはやマイノリティではなくなった。自己アイデンティティ探しや、女性の〈自己語り〉の内的衝動が文化を揺る表現となった女性表現の変遷とポスト・フェミニズム期の女性表現の方向を探る文芸評論集。

『英語で読むアメリカのフェミニズム』  
藤枝滯子、松野潔子他著 創元社  
1991年4月 1500円(税込)

アメリカのウーマンリブの原典22篇が、新たによみがえる。関西の女性研究者たちが思想／文学・芸術／女の生と性の3つのテーマごとに文献ガイドを試みている。英語のテキストとしても有効。女性問題の原書を英語で読む入門書でもある。収録されているフェミニストはロビン・モーガン、グロリア・スタインム、アドリエンス・リッチ、ジェア・ハイト他。

『よびかわすフェミニズム—フェミニズム文学批評とアメリカ』  
下河辺美知子、篠目清美編 英潮社新社  
1990年10月 4000円(税込)

フェミニズムという世界を、「アメリカ」と「文学批評」に焦点をあてたフェミニズム文学批評のアソロジー。エレイン・ショウウォーター「女の時間、女の空間」、ニーナ・ベウム「アメリカ小説理論はいかにして女性作家を排除してきたか」、ジェイン・ギャロップ「母親の言葉を読む」他10篇の論文を収録。

『女はみんな女神』 ジーン・シノダ・ボーレン 新水社  
村本詔司 村本邦子訳 1991年1月 2300円(税込)  
女性同士が女性の多様性を受け入れ、相互の違いを尊重できるような関係を結び、お互いに新たな可能性を開く—本書はそのために有効なユングとフェミニズムの両方の視点に立って書かれた心理学書。まえがき グロリア・スタインム はじめに「どの女の心のなかにも女神がいる」終章「女はみんなヒロイン」ギリシア神話の7人の女神の性格に女神の元型を求める。

『90年代のアダムとイヴ』 上野千鶴子 NHK取材班  
日本放送出版協会 1991年2月 1200円(税込)  
1990年7月に放送されたNHKスペシャルの出版化。欧米諸国の女と男の新たな関係と価値観を取材。男らしさのジレンマ／子どもの少産時代／家族の変貌／境界線を越えた女たち他。

## 『性愛論』

上野千鶴子 河出書房新社

1991年4月 1300円(税込)

対話形式の性愛論。「遊女と地女—江戸の性愛考」田中優子、「女と文明」梅棹忠夫、「見果てぬ夢—対幻想をめぐって」森崎和江他、書下し「メタ・ディスクール=性愛論」上野千鶴子。

## 『おんなとおこの女性学』

金谷千慧子 拓植書房

1991年4月 1854円(税込)

80年代の10年間、大学・短大で女性学を担当してきた著者が男女のための女性学をまとめたもの。特に労働論の立場からの女性学に焦点をあてた論文が多い。短大生のレポートにみる女性の労働観・結婚観の変遷/女子大生の就職事情/パートタイマーの急増と子育て/男性の生き方・女性の働き方/著者作成による男性の行動計画草案。12頁をご参照下さい。

## 『非』常識のすすめ』

宮迫千鶴 集英社

1991年3月 1000円(税込)

「コスモポリタン」に連載され好評を呼んだ宮迫流人生相談。宮迫氏の真摯で誠実な解答ぶりに魅かれる。若い女性や娘たちにおススメ本。

## 『もうひとつの生き方』

宮迫千鶴 海竜社

1991年3月 1200円(税込)

とても気持ちよく読める生き方エッセイ。決して“○○せねばならない”などの押しつけがない。のびやかなセンスとユーモアと芯のある楽観主義が読むものを生き生きさせてくれる。心の目を成長させる/もうひとつの生き方/夫婦について/親子について他。

## 『“女だから”のふしぎ—がんばれ女の子シリーズ①』

魔女っ子くらぶ作 遙書房発行 星雲社発売

1991年2月 1339円(税込)

学校や家族の中で、いつも“女だから”“女のくせに”といわれて、ソンをしている女の子たちに贈るメッセージ。“女だから”の押しつけをフッとばし、のびのび生きるための応援歌。教師や親たちの女の子観を変えるための必読書。軽いタッチで読みやすい。

『美の鎖—エステ・整形で何が起きているか』

宮 淑子 汐文社 1991年4月 1300円(税込)

美をあおる無認可企業、エステティックの実態をレポート。自分の肉体の一部にメスを入れ、血を流してまでも美を買い求める行為は医療の逸脱行為ではなからうか。美をあおる広告文の虚偽、肥大する欲望と個人の選択、“美のくさり”と“エイジングのくさり”に縛られる意識から脱皮すること。女性自身が賢くならねば……。

## 『ポルノグラフィ—女を所有する男たち』

アンドレア・ドウォーキン 寺沢みづほ訳 青土社

1991年4月 2400円(税込)

ポルノグラフィがもはや存在しなくなる時、私たちは自分が自分であることを知るだろう。それが現実存在しているかぎり、私たちはポルノの中の女と同一であることを理解しなければならない。『インターコース』のドウォーキンが性描写の内に秘匿されている〈意味〉を暴き出すポルノ論。

## 『シンデレラ』

アラン・ダンダス編 池上嘉彦他訳

紀伊国屋書店 1991年2月 2900円(税込)

世界のさまざまな地域に存在する「シンデレラ」の原型とルーツをさぐる好読みもの。灰かぶり少女(グリム兄弟)、中国のシンデレラ、シンデレラの靴他。

『妹の力』社会学』

畑田国男 コスモの本

1991年2月 1800円(税込)

「サザエさん」(姉型)時代から、「ちびまる子ちゃん」(妹型)時代へ。「妹」とは姉妹、兄妹、大勢のきょうだいの「末っ子」をふくむ、「妹型」人間の総称。いま時代は「妹の力」が強くなっているという妹型人間をキーワードに世相を読む社会学。

## 『家族・パートナー』

『母という経験—自立から受容へ 少女文学を再読して』

宮迫千鶴 平凡社 1991年3月 2200円(税込)

本号特集目録2頁に既出。

『単身赴任—家庭と職業のはざまで』

岩男寿美子, 斉藤浩子, 福富 護 有斐閣

1991年3月 1545円(税込)

単身赴任について考える一冊。単身赴任中の親と子 単身赴任と夫婦生活(性別役割分業の見直し 夫婦のコミュニケーション 性生活他) 単身赴任の日本の背景 企業サイドからの単身赴任 これからの単身赴任、これからの家族。

『分散家族』

萩原 勝 人文書院

1991年2月 1442円(税込)

著者はTVのディレクター、妻は日本語教師として世界の各地へ赴任し、娘は外国留学。それぞれが自分の生き方を充実させるには、各自が他に寄りかかることなく生活できる術が必要。これからこういう「分散家族」が多くなるのではなからうか。父親が書いた体験的家族エッセイ。

『ニューヨークで夢探し』

多賀幹子 時事通信社

1991年2月 1300円(税込)

あくせく働く時代から、家庭生活重視の家庭回帰の時代に入ったといわれるアメリカの女性とその家族13人をレポート。自分にとって最も自然な生き方を探してニューヨークに生きるキャリアウーマン、ホームメーカー(主婦)など。全米各地で「アットホーム・マザー(家庭にいる母親)」の会も結成されているという。

『ウェディング・ベルを鳴らしたい』

「あつと5」編集室 時事通信社

1990年1月 1300円(税込)

東京の結婚相談所、仲人会社を舞台に取材した当世結婚事情。新聞の好評連載の出版化。(本号9頁参照)

『風のホーキにまたがって』

五木寛之 駒尺喜美

読売新聞社 1991年4月 1300円(税込)

作家と大学教授が自由奔放に語り合う往復書簡集。

## 『拜啓 粗大ゴミ予備軍殿』

東急エージェンシー女性ライフデザイナーズグループ編  
東急エージェンシー 1990年9月 900円(税込)  
アンケート調査にみる30・40代夫婦の生の声。夫の家事、  
やっている気の夫、あてにしていない妻/定年後の夫婦  
の姿に大きなミゾ/嫁 VS 姑/やや妻寄りな夫/仕事か  
どんなに辛くとも、「主夫」には強い抵抗感他。

## 『スウェーデン人はいま幸せか』

訓覇法子  
NHK ブックス 1991年4月 780円(税込)  
スウェーデン在住15年になるストックホルム大学の社会  
福祉研究員の著者が先進福祉社会の理想と現実を語る。  
福祉を支える哲学と組織/福祉国家の陰に生きる人々/  
検証「スウェーデンの神話」他。

## 『誕生から死まで—カナダと日本生活文化比較』

関口礼子 勁草書房 1991年1月 2472円(税込)  
カナダ滞在経験をふまえて、出産・保育、教育、労働、  
避妊・中絶、結婚・離婚など、カナダ事情を報告する本  
書は日本のそれらと比較するとき唆々に富む本だ。

## 〔労働・法〕

## 『戸籍が見張る暮らし』

佐藤文明 現代書館  
1991年3月 1800円(税込)  
戸籍・住民票 国勢調査など戸籍とその周辺の制度を見  
直す。管理システムとしての戸籍、奇妙な戸籍上の「氏」、  
住民票と地方自治、鬼ッ子国勢調査他。

## 『家族と法律—かわりゆく夫婦・親子関係をめぐって』

中川 淳 有信堂高文社 1991年4月 2060円(税込)

## 『ネットワークを活用するワーキング・ウーマンたち』

グループ エス・アール 弓立社  
1991年4月 1200円(税込)  
現在増えつつある女性のための仕事と関わるネットワ  
ークを紹介。序章 男の人脈、女のネットワーク〈キャリ  
ア派のネットワーク〉〈社会派のネットワーク〉〈向上派  
のネットワーク〉〈パソコン・ネットワーク〉〈ボランテ  
ィア派のネットワーク〉の5項目からなる。

## 『主婦の手づくり選挙入門』あしたをひらく女性の会編

エスエル出版会 1991年4月 1200円(税込)  
90年秋、不正と汚職、買収で出直し市議選を行った兵庫  
県川西市で、二名の女性議員を上位当選させた主婦グ  
ループの体験記。

## 〔ノンフィクション・評論・創作〕

## 『恋愛小説の陥穽』

三枝和子 青土社  
1991年1月 1800円(税込)  
漱石、谷崎、太宰、川端、荷風、三島ら9人の物放した  
日本の大物男性作家たちの恋愛小説を取り上げ、女性の  
立場から読み直した話題の文学評論。

## 『紫式部のメッセージ』

駒尺喜美 朝日選書  
1991年3月 960円(税込)  
「源氏物語」を女性学の視点で読み換えを試みた衝撃的  
な本。読み換えの手がかりを「紫式部日記」に求めて、  
特に「宇治十帖」は当時の女性たちの“結婚幻想”から  
救い出そうとして大胆な試みが行われているという。

## 『女に』

谷川俊太郎詩集 佐野洋子絵 マガジンハウス  
1991年3月 1600円(税込)  
マンガを買って私はあなたと笑いにいく/西瓜を貰って  
私はあなたと食べにいく/詩を書いて私はあなたに見せ  
にいく/何ももたずに私はあなたとぼんやりしにいく/  
川を渡って私はあなたに会いにいく。詩とエッチングの  
愛の物語。パートナーの二人の作品。

## 『風の婚』

道浦母都子 河出書房新社  
1991年4月 1200円(税込)  
「今日われは妻を解かれて長月の青しとどなる芝草の  
上」「歌よみてうた残しゆくそれのみで寂しからずや女  
うたよみ」「——婚とは女を昏くするもの」など新刊歌  
集。

## 『1・9・4・7 石内都写真集』

石内 都 アイビーシー  
1990年12月 4800円(税込)  
女性の手と足だけ、それも著者と同じ1947年生まれ的女  
性だけの写真集。写真家もモデルも40～41歳を迎えた頃  
の作品。

## 『少女たちの放課後』

那須ゆかり  
JICC出版(JICCブックレット)  
1990年8月 390円(税込)  
学校の外の女子高生たちの世界をルポ。あぶな〜い夏休  
み/渋谷ナンパ通り午前2時/アルバイトも楽じゃな  
い/占いに魅せられて。

## 『出会いに生きる』

寿岳章子 海竜社  
1991年2月 1300円(税込)  
女性論、家族論、教育論、そして京の暮らしエッセイ。  
語り口が鮮やかで元気になれる本。

## 『なんてすてきな女たち』

松木貞夫 筑摩書房  
1991年1月 980円(税込)  
エネルギーな街、大阪でたくましく生きる5人の女  
性たちの物語。おもしろいこと大好き人間・イベント仕  
掛人 松井寛子 うたい続ける望郷の歌 季 順子他。

## 〔資料・雑誌〕

## 『女性のデータブック』

井上輝子、江原由美子編  
有斐閣選書 1991年4月 2987円(税込)  
女性に関する便利で有効なデータブックが出た。家族  
性・からだ・労働・教育・社会進出・政治参加意識・メ  
ディアの7項目を柱に90のアイテム、32のコラム、32  
の図表がなる女性資料の力作。女性行政の立案・実施に  
も充分活用できるし、またマスコミ、研究、グループ活  
動にも最適。巻末には戦後から90年までの女性史年表も  
付記。

『青鞥』女性解放論集 堀場清子編 岩波文庫  
1991年4月 620円(税込)  
創刊以来全52冊からなる「青鞥」の代表的論文の選・40  
篇。

『本が好き—出版業界で活躍する女性17人のメッセージ』  
エポックの会編 メディアファクトリー  
1991年4月 1100円(税込)  
出版業界に籍を置く女性たちの会「エポックの会」のメン  
バーが、それぞれの本との関わりを語る。出版業界に  
関心ある人には参考になる。「出版なんでも事典」が各  
頁の下段に添えられていて便利。

『活字メディアの最前線』 塩澤実信 論創社  
1991年4月 1550円(税込)  
出版ジャーナリストによる活字メディア・レポート。雑  
誌のターゲットは女性であり、出版界を支えているのは  
女性だという。親を巻き込んだ赤ちゃん雑誌、'90年代  
は、新・中・高年雑誌の決戦時代。日本の出版業界はよ  
やく二兆円産業に成長したものの、個々は零細会社が多  
いという。

『フランス文学/男と女と』 上村くにこ 西川祐子編  
勁草書房 1991年4月 2060円(税込)  
男性、女性を問わず、読者は男性の視点からテキストを  
読んできた。恋愛小説では「男の快楽」を読書体験して  
きた。本書は逆に女性の目で読み直し、男性が女性の目  
で読み直された古典を楽しむ時ではないかというフラン  
ス文学評論。取上げられている作品は「トリスタン・イ  
ズー物語」「谷間の百合」「失われた時を求めて」「招か  
れた女」他。

現代4月増刊号「女たちへ」 講談社  
1991年4月 480円(税込)  
澤地久枝責任編集による渾身の女性誌の試み。独占手記  
&インタビュー 柴玲「檻のなかの祖国よ」女性100人  
の提言「憲法九条と私たちの選択」「昭和・恋のうた100  
選」辺見じゅん 娘たちへ贈ることば 大江健三郎 エ  
コロジー特集「沈黙の春」ふたたび」他。

現代のエスプリ 284「広報の時代」 至文堂  
1991年3月 1100円(税込)  
なぜ「広報の時代」なのかを問う一冊。広報の社会学/  
イベントと広報/自治体広報/広報担当者の条件/生活  
者が望む広報

レヴァイアサン No.8「特集 フェミニズムと社会運  
動」 木鐸社 1991年4月 2060円(税込)  
フェミニズム政治学の可能性、有権者としての日本女性、  
アメリカの制度とフェミニズム——1980年代におけるカ  
トリック教会と軍隊、職場における闘争——お茶くみの  
反乱他。

ユスティティア②「特集 家族・社会・国家」  
比較法制研究所 ミネルヴァ書房  
1991年4月 1700円(税込)  
歴史の中の家族、近代国家と家族モデル(西川祐子)他。

へるめすNo.31 岩波書店  
1991年5月 1750円(税込)  
「小特集・女性 SFのフロンティア」インタビュー・サ  
イボーグ・フェミニズムの文学 ダナ・ハラウェイ他。

imago [イマーゴ] Vol.2-5「特集 家族 失われたエ  
ディプス神話」 青土社 1991年5月 980円(税込)  
N・チョドロウ論 ポスト・ファミリーと家族の感情  
(金井淑子)、対談「家族を作って親になるのは子供時  
代の復讐なのか」岸田秀 VS 井坂洋子他。

現代思想 1991・3月号「特集 バイオフェミニズム」  
青土社 1991年3月 1100円(税込)  
対談「セクシュアリティの未来に向けて」(荻野美穂  
VS 金塚貞文)「乳房を奪還せよ」広瀬洋子 『産む』  
身体近代』首藤美香子他。

仏教 No.15「特集 差別」 法蔵館  
1991年4月 1900円(税込)  
対談「差別の構造」色川大吉 上野千鶴子 池上千寿子  
「エイズ感染者に対する差別」落合誓子「水子供養と女  
の願い」井上治代「墓」から差別される女性たち」内  
海愛子「黄色い白人——日本人のアジア観」他。

文部時報 No.1369「特集 女性と生涯学習」  
ぎょうせい 1991年2月 500円(税込)  
座談会「女性と生涯学習」婦人教育と女性学、女性と家  
族に関する情報システム他。

季刊フェミナ 1991年春号 学習研究社  
1991年3月 980円  
第3回フェミナ賞発表

現代詩ラ・メール 春号 新川和江・吉原幸子編集  
思潮社 1991年4月 1000円(税込)  
「特集・愛について」

月刊女性情報  
パド・ウィメンズオフィス 各2500円(税込)  
2月号 女性たちにとっての湾岸戦争  
3月号 女性たちにとっての湾岸戦争 PART II  
4月号 育児休業 女性と選挙

### 〔文庫になった本〕

『私の猫たち許してほしい』 佐野洋子 ちくま 450円

『ハイブリッドな子供たち』 宮迫千鶴 河出文庫  
480円

『私は変温動物』 山田詠美 講談社 380円

『ハーバードの女たち』 リズ・ローマン・ガレーズ  
講談社文庫 560円

『アナイス・ニンの日記』 原 麗衣訳 ちくま文庫  
1200円(税込)

『夫、あぶない』 円 より子 ちくま文庫 540円

### 〔再版になった本〕

『女性画家列伝』 若桑みどり 岩波新書  
650円(税込)



# わたしの出会った本

## 『ウェディング・ベルを鳴らしたい』

「あっと5」編集室著 時事通信社刊 1300円(税込)

女性雑誌研究会 飯塚 幸子



25歳を過ぎた新年、私のもとに届いた年賀状には「結婚はまだ?」「早く素敵な彼を見つけてネ」……こんなフレーズが目立った。世間もマスコミも企業も、ある一定の年齢をした者を結婚させたがる風潮が、この国にはある。人はそれぞれ、創造的な生き方があって、女と男の“対の成就”への選択も多様化して良いはずなのに!!

本書は、毎日新聞夕刊(東京本社版)の連載『現代けっこん鑑』をまとめ、加筆したもの。万人の関心事である結婚に絡むビジネス、人々の体験談、悲喜劇、人間模様が散りばめられている。“三高”という経済的安定を求める女達、“美人で優しく従順”という女を追い求める男達。それをつけねらう結婚情報産業の商法。その他、結婚を二人の想いだけで収まらせない見栄、親、家、世間の常識 etc.……が、本書を通して見えてくる。

それらは女性学に関わっている私にとって、情けない程、打算的で、旧態依然たるものだった。常日頃から女性学に暖かいエールをおくってくださっている本書の編集者は、「これが、この国のある断面であることは、否定できないところ。まったく困ったもの。」と、私に語った。目下、“適齢期”という世間の常識にチクチクつかれている私は、その言葉に頷かざるを得ない。現実を垣間見つつ、“対の成就”のありかたをあらためて考えさせてくれる一冊である。

### 松香堂書店新刊案内

世界各地の女性作家が描き出す  
「文学作品の中の女たち」が、  
一堂に集まった!

1991年6月発売

現状の変革を求める女たちの声が  
地球規模で拡がってきた。

## 女たちの 世界文学

ぬりかえられた女性像

風呂本悖子・楠瀬佳子・池内靖子編

女性作家の作品群と、その中から  
浮かび上がってくる女性像

池内靖子	田辺 欧
伊田久美子	沼野 恭子
市場 淳子	馬場美奈子
稲垣紀代	松原美恵
大野光子	藤元優子
岡村久子	風呂本悖子
小野理子	南田みどり
笈久美子	元木 淳子
楠瀬佳子	山蔭 昭子
国領 苑子	吉田 純子
高橋 和	渡辺 聡子

・B6判・400頁  
・1991年6月発行  
・定価：2600円(本体2525円)  
・送料1冊310円

### ☆事務局より☆

●91年度会費未納の方はお早めにお振込願います。個人会員は一八〇〇円、団体会員は二二〇〇円、新規の方は入会金五〇〇円もあわせてお願います。  
●住所・氏名等の変更は、新旧ともお知らせください。  
●会費を募集しています。友人知人、図書館、女性センター、学校等にお勧めくださいますようお願い致します。

## 《あなたの情報・私の情報》

『私たちは忘れない 朝鮮人従軍慰安婦  
—在日同胞女性からみた従軍慰安婦問題—』  
をつくりました。

キム・ブジャ

昨年来、韓国の女性たちは、戦後46年間も歴史の闇に葬られてきた従軍慰安婦（韓国では挺身隊という）問題を社会問題化してきました。それは、昨年韓日間で戦後処理問題が再燃した際にもこの問題が取り上げられないばかりか、6月に国会で労働省局長が「国家総動員法に基づく徴用には従軍慰安婦は関係ない」「慰安婦は民間業者が連れ歩いたので調査できない」と答弁したことがきっかけになっています。韓国の37の女性団体は歴史的事実に対するこの答弁と、韓日両政府の責任回避の姿勢に抗議するため、韓日両政府に対し「公開書簡」を発表、その後挺身隊問題対策協議会を発足させたのです。

私たちは、この問題の発火点となった「挺身隊取材記」の著者、尹貞玉挺身隊問題対策協議会会長の来日（12月）時に彼女に会い、それをきっかけに在日同胞女性の視点からこの問題をとらえ直すため、この度パンフをつくりました。内容は尹氏の「挺身隊取材記」、「座談会—在日同胞女性からみた従軍慰安婦問題」、「アンケート—在日同胞はこう考える」、「公開書簡」ほか資料です。

近現代の日本と朝鮮と、女と男に関わるさまざまな問題が集約されている「従軍慰安婦」問題の重要性を知ってもらおう一助になれば、と思います。ぜひ、一読下さい。

連絡先：〒157 東京都世田谷区南烏山2-36-20

第一乙黒ビル4F Tel 03-3300-4157

従軍慰安婦問題を考える在日同胞女性の会（仮称）  
頒 価：500円（送料別：松香堂でも扱っています）

「三井マリ子の視点」をおすすめします！

三井マリ子と新しい政治を創る会  
木 崎 志づ香

三井マリ子は4年前都議に当選以来、男女平等を中心に、人権、教育、環境政策を政治にぶつけてきました。

4年前の東京都議会は、ほとんど質問らしい質問もない上、緊張感のかけらもなく、眠っているかのようでした。「男女平等？そんなもの政治じゃない」といわれながらも、全局に、女性の登用をつきつけ、性差別撤廃条約、都の行動計画の遵守を約束させました。

特に1990年の予算特別委員会における性の商品化（おいらん、ミニコン、ポスター ETC.）の質問は、その後のマスコミ報道で片鱗が伝えられました。しかし、三井マリ子が地方自治体の中で性の商品化をどのように政策課題としてとりあげたかは余り知られていません。男性主導型のマスメディアの体質のせいでもあると思います。この「三井マリ子の視点」によってその真意がおわかりいただけると思います。また、女性の人権や男女平等の問題を政策課題とし、行政に質問していくためには、それなりの方法や技術が必要です。「三井マリ子の視点」は、新人議員の政策や質問づくりにもかならず役立つ一冊です。

「女性問題って政治なんだなァってわかるんだよね」  
「ムズカシイ議会用語がスッキリ解説されてるの」  
「速記録にはない野次や削除部分も再現されてて  
ギョッキョク」

「私も議員になろうかなって女のココに  
夢を抱かせちゃう」

「市民派議員をもっと増やさなくちゃと思ったヨ」  
という感想がよせられています。

頒 価：1000円 松香堂でも扱っています。

『女たちの世界文学—ぬりかえられた女性像』  
（風呂本惇子、楠瀬佳子、池内靖子編）  
池 内 靖 子

この本のタイトルに、私たちはいくつかの共通の熱い思いを込めました。

一つは、日本での世界文学の紹介のされ方は、主として欧米の「メジャーな」国々の「メジャーな」作家（なぜか多くは男性）たちの作品が中心だったので、これを見直したいと思いました。私たちが日頃受け取る情報には発信源、発信量ともに大きな偏りがあり、ベルリンの壁の崩壊や、湾岸戦争によって、その地域がにわか注目されることはあっても、アジア、アフリカ、ラテン・アメリカ、いわゆる中東、東欧、北欧などの地域の情報は絶対的に不足しています。南アフリカの例えばソウェト、隣国でもなお遠い韓国の農村、軍事政権下のビルマに生きる人々の生活を知ること、逆に、世界都市、ニューヨーク、パリ、ロンドン、東京にも、「アパルトヘイト」や、過酷な搾取、抑圧があることを透視することができます。

二つ目に、「女たち」というのは、「女性作家の」という意味に留まりません。あまり知られていない国々、あるいはメジャーな国々にあっても周辺的な存在の女性作家たちに夢中になっている「女性研究者たち」の意味もあります。描かれる女たちの苦闘に我が身の生き方を照らし合わせ、表現することの意味を掘り下げながら、女性研究者自身が最も熱心な読者として、もっと広範な読者に届けたいというこだわりの紹介でもあります。このこだわりを共有する作り手に「フェミニスト企画」の女たちも加わっています。

最後に、「ぬりかえられた女性像」というのは、単にヒロインがヒーローに取って代わるという意味ではなく、ヒーロー／ヒロインの支配的な関係そのものの脱構築を目指すものです。そして「性という変数」を入れて分析することで、社会の在り様の解説がこれまでよりずっと豊かになることは、この本を一読すればきっと納得できるでしょう。

1991年6月発売 2600円 松香堂刊

英文誌「Childbirth in Japan」をおすすめします！

Birth International 河 合 蘭

日本の出産の過去、現在、そして未来への展望を英語で書いた本を作りました。

私たちバース・インターナショナルは出産に関する国際的な情報交換と正しい理解を目指すグループで、メンバーは在日外国人の出産を長年支援してきたバース・エデュケイター清水ルイズ、英国の自然分娩法アクティブ・バースのバース・エデュケイター戸田律子、出産を専門とするジャーナリストきくちさかえ、同じく河合蘭の計4名です。

第一章ではまず、日本の現状を病院、個人病院、助産院に分けて探り、後半は日本で出産した外国人女性のアンケートをもとに“外人の目に映った日本の出産”像を明瞭に浮かび上がらせています。第二章では日本の出産の歴史を古事記の昔からひもとき、西洋式出産への変革に至るまでの道のりをたどってみました。第三章は上下北半島で出会ったお産婆さんの家庭分娩を写真とレポートで紹介し、後半は東京の下町に住む産婆さんたちが日本の知恵を語る座談会です。

本書は助産婦世界大会々場で発売したのですが、全編「出産は医学の一部であるばかりではなく、文化や生活の一部分でもある」という観点に立っており、人類学、社会学など幅広い分野の興味に応えます。また、これから日本で出産する外国人にとっては、異国の出産システムに対して心を開く鍵のひとつとなるはずで、(A4判119ページ 頒価：1236円) 松香堂で扱っています。

婦人民主新聞創刊45周年を迎え  
「ふえみん」に変身!

婦人民主クラブ・婦人民主新聞

婦人民主新聞は平和を願う女たちが集まって、1946年に創刊されました。以来45年、反戦・平和、環境、ウーマンリブ、脱原発、教育などを取りあげてきました。どの党派にも属さず、女たちの身近な情報がえられる新聞として、多くの女性たちの支持を得てきました。

今度、45周年を記念して、「フェミニズム」と「ふみん」の意味を併せ、「ふえみん」と愛称をつけ、紙面も雑誌風に変身! 女たちの情報誌として、活躍していくと、編集部一同燃えています。

週刊 金曜日発行 一カ月650円

また、婦人民主新聞の縮刷版統編も7月発行の予定です。1981年から1990年までの10年間は、国連婦人の10年の後半5年間を含み、均等法、脱原発等さまざまな動きがありました。1946年からの6巻とともに資料として手許におきたいものです。

最後に、「写真にみる女たちの戦後」として、女たちの戦後15年間の表情を絵はがきにしました。現代の女たちとまた違った女たちの表情は、一見の価値があります。

申込み先: 東京都渋谷区神宮前3-31-18

婦人民主クラブ・婦人民主新聞

Tel 03-3402-3238 FAX 03-3401-3453

振替 東京6-196455

縮刷版7巻・8巻 22,000円(各11,000円)

既刊1~6巻 40,000円(各7,000円)

絵はがき 5枚1組 2種 300円

260人が選んだブックリストを発行しました!

「きみには関係ないことか

戦争と平和を考えるための子どもの本② 1991」

京都家庭文庫地域文庫連絡会 小林 治子

京都で子ども文庫活動をしている私たちは、1984年に「きみには関係ないことか 戦争を考えるための子どもの本 1984」を発行し、全国に広がったその反響の大きさに驚きました。

戦後日本で発行された子どもの本で戦争をテーマにした約720点を読みあて、文庫や図書館、学校等に揃え、子どもや親に読んでほしいと考えた本を420点選び、テーマ別に配列し、140字の解説文付きで紹介したものです。

以来、7年が経過し、1984年から1989年に発行された本650点について、前回よりも大勢の参加(260人)により読書運動を展開し、標題のブックリストをまとめました。今回は350点が取載されています。

世界の各地では戦争、紛争、内戦が絶え間なく、本年1月には湾岸戦争が起ってしまいました。平和を望む気持ちは強いのにどうして戦争はなくなるのでしょうか? 日本では戦争体験者が既に祖父母の世代になり、子ども達だけではなく、両親の世代でさえも、戦争をテーマにした本は暗く、重いので読むのがいやだという、拒否反応があります。日本人が平和ボケと言われる所以でしょう。

このブックリストが家庭や地域、学校などで活用され、親と子が戦争と平和を考えるための手がかりになればと希望します。

頒 価: 500円(送料別: 松香堂で扱っています)

テレビ中の性差別、気になっていませんか?

FCT・「GAZETTE」購読を

FCT市民のテレビの会(子どものテレビの会)

なにかというと、オバサン、オバタリアンとばかりにしたようなコメントつきで、テレビに登場する女性たち、全然関係ない商品なのに、ポルノチックにアイキャッチャーとしてつかわれている若い女性たち、男の世界、男の約束といった言葉が美的に使われる子ども番組……なにげなく見てしまえばそれまでですが、ちょっと意識的に見ると、「これは問題だ! 放ってはおけない」と思うことが多いテレビです。

テレビを見るとその国の民度がわかる、といわれれば、まことに恥づかしい日本のテレビ。「テレビなんか期待しない、いいかげんなテレビをぼんやり見ていればいいじゃない……」といった対応をする人が多いのも実情ですが、湾岸戦争を伝えるニュースに振り回されてみれば、テレビはやはり恐ろしい力をもったメディアであることが実感されました。

視聴者として成長すること、きちんと見て反応すること、どういふものが見たいのか表現すること、はテレビを見る側の責任でもありましょう。

テレビを見る目を養うために、なにが問題か気づくために、ぜひ「ガゼット」を購読してみてください。

年間購読料2000円(郵送料込み)、年4回発行

申込先: 藤沢市善行団地5-3-503

新開清子(0466-81-8307)

問い合わせ先: 03-721-8694 竹内希衣子

「女性のエンカウンター(話し合い)グループ」  
に参加しませんか?

グループ・ピュアミカ

色々な女性達と語り合ってみたい、自分のことをあれこれと話してみたいし他の人の考えていることに耳を傾けてみたい。……こんな思いを出発点にして生まれた出会いと話し合い(エンカウンター)の会です。あらかじめ話し合うテーマを決めてしまうのではなく、その時その場で話したくなったことを誰からでも自由に話していきます。話したくないときや話す準備ができていないときは勿論黙っていることもできます。人の迷惑にならない範囲でなら、自分の好きなように振る舞うことができます。子どもがいるので外出や外泊がままならないという方も参加できるようにと思い、数名の保育者を頼みました。2泊3日を一緒に過ごしてみませんか?

と き: 1991年8月9日(金)午後3時から

8月11日(日)正午まで

と ころ: 早稲田奉仕園 新宿区西早稲田2-3-1

参加費: おとな30,000円、子ども15,000円

定 員: おとな8名、子ども3名

主 催: ピュアミカ(純粋な女友達)スタッフ一同

申し込み締切期日: 1991年6月22日必着

お問い合わせ、申し込みはすべて郵送にて下記にてお願いします。

〒113 文京区本郷郵便局留

「女性のエンカウンターグループ」

ピュアミカ行」

## ＝ 研究ノート ＝

「体力と甘えの神話」は  
越えられるか

『おんなとおとこの女性学』より



みつ 金谷 千慧子

労働経済のゼミが終わって、慣例のように駅前のZ亭  
になだれ込む。(じつは私、ゼミ生なのです)

やっぱり黙ってはおれなかった。

「処女論文……てさっきいったけどね、あのいいか  
たって男が学問の世界を牛耳っていたからやで」と。

「うーん。そうかもしれないね、童貞論文でないもん  
なー。」

処女論文のみならず、処女航海、処女峰などなど、女  
性が排除された世界では、女の性は男たちの闘いの戦利  
品になったり、攻撃(レイプ)・獲得(所有)の対象に  
されてきた。そのうえに女性は体力が劣っているや汚れ  
ているや甘えているからだめなんだなどと的はずれの非  
難の対象にされてきた。「体力と甘えの神話を越えて」  
というのは、男性の筋力・金力と女性の従属と依存の構  
造が神話にしかすぎないんだという意味を込めて、タイ  
トルの副題につけたものである。

Z亭に戻って、ゼミ生のY氏はこういうのだ。

「男性社会の攻撃をするときの戦略の問題やと思うん  
やけど、『処女論文』けしからん！というて紅い気炎を  
あげるのか、サラリとかわして『童貞論文』というてし  
まうか、『はじめの論文』で通すかそういう戦略上の  
問題が、フェミニズムを一部の者の物にするか男性も含  
めたものにするかの課題だと思うなー」と。

でも、戦略上の問題というだけのことなのかなーと私  
は思う。「童貞論文」とやってるかざりはフェミニズム  
は、一定のインパクトをもちながら面白おかしく風俗化  
されていく。やはり「処女論文」と連発されるときに、  
女性がどんな思いをするのかを、言葉でまたあらゆる表  
現手段で明確に表現し男性に知らしめねば、フェミニズ  
ムが女性に生氣をもたらすことにはならない。

「処女論文」を連発している席上で、男性が、犯され  
る女の肢体をイメージしているのは容易に想像できるが、  
連想されながら同じ席にいることは暴力行為をうけてい  
ることと同種なのだということを、今は真剣に主張すること  
が大切なのだと思う。その過程のあとに共通の了解で「は  
じめての」という言葉の選択が可能になるのだと思う。

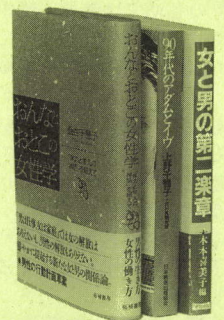
(ただ「処女」をつかっていたのは女性研究者だったの  
だ)

前書きが長くなってしまったが、じつはこの度『おん  
なとおとこの女性学』(柘植書房91年4月)をだした。  
多作主義ではないのにこの一年間に『世界の家族—やっ  
ぱり女の居場所は家庭なのか』(芸林書房90年10月)、『女  
たちの三代を語りついで』(明石書房91年5月)の3冊  
を出した。

いままでずっと正攻法でしか生きてこなかった、ほと  
んどかっこよくない20年余を全部はきだしたということ  
になる。とくに女性学の授業を担当して10年を越えたが、  
京都精華大学での非常勤をやめて2年(解雇、ただし解  
雇事由は全然わからず)、同志社大学をやめて1年(退  
職)、その間の女性学の授業のまとめを、1章から7章  
にした。

1. 女と男の女性学 2. 女性と労働—わたし・しごと・みらい 3. 女性労働の現状と今後の課題 4. 7  
人に聞く「わたしと仕事」 5. 産むことと働くこと  
6. 女性の労働と社会保障 7. 男性の生き方、女性の  
働き方 である。終章に「21世紀を生きる男性のための  
行動計画」草案をつくった。

これを書きつづけながらも、フェミニズム関係者と女  
性に多い非常勤講師の問題はいつ解決の明りがみえるの  
だろうかと暗い気持ち  
であったが、一方で、  
いよいよ今年の婦人週  
間のテーマには「男性  
の生き方の変革」があ  
らわれる時代になって  
いることが、すこし歴  
史の進歩かなと思っ  
たりしている。



## ＝ 女のスペース ＝

## 女性のカウンセリング

## 〈ルーム和敬〉

責任者 長谷川 七重



〈ルーム和敬〉のカウンセラーたち

日本女性学研究会のフェミニスト・セラピー分科会のメンバー9人が、〈ルーム和敬〉を開設してまもなく一年になろうとしている。

京都では初めてのフェミニスト・セラピーとあって、度々マスコミに報道されたおかげで、来談件数は約80件、無料電話相談件数は90件にもなり、まずは順調なすべり出しといえよう。

内容的には、離婚問題、生きがい喪失、からだの問題、子育て、人間関係の悩み、神経症、うつ病など様々で、近畿圏を越える範囲からも相談があり、そのニーズの高さに驚いている。特に、役割意識（長男の嫁は親の介護をすべきとか、女は子どもを産むべきなど）にしばられている人の割合が多いようだ。

こういった悩みに対しては、思い込んでいる役割意識から、広い視野をもって脱け出せる手助けをしている。現在の女性をとりまく状況は、一朝一夕には変え難く、個人の力ではどうしようもないという場合も多い。だが、その状況を共に問い直すことや、「役割を遂行できなくても、あなたは何も落伍者ではありませんよ」と、支持するだけでも元気になって自信を取りもどしていく女性たちを見ると、このルームを開設してよかったとつくづく思う。カウンセリングやセラピーは、特別な考え方や思想を押しつけるべきではないという意見もあるが、女性差別の状況がある限りは、その状況を考慮した対応は必要不可欠といえよう。

また、現在行なっている「女性の自己トレーニング」の連続講座は、30名を越す参加者がある。参加者は同じ悩みを持つ人、同じような考え方をする人たちが沢山いるんだということに先ず安心する。自分自身を認めたり、見つけ直すことで新たな自分と出会ったり、気の合う仲間を見つけるなど、グループカウンセリングの良さを味わってもらっている。読書や講義を聴くこと、書くことも重要であるが、自分をさらけ出して語り合うことは忘れられない体験となり、新たな力強い一歩につながっていくと思う。

〈和敬〉のメンバーは、各々本業で収入を得て、今のところ運営費を差し引くとほとんど収益のあがらない活動を、本業以上に(?)熱意を持って行なっている。それは第一に、悩みを持つ女性たちに喜んでもらっているというやりがいであり、第二に、自分たちの学び合いの場にもなっているということ、第三に、メンバーはお互いに非常に気の合う仲間たちであるからだろう。

必要と思われるときには、女性の立場に立って対応してくれる弁護士や医師の紹介も行なっている。今後も様々な専門知識が必要になってくると思われるので、情報提供など協力して下さる方のご連絡も待っている。

## 女性のカウンセリング 〈ルーム和敬〉

普段の相談は下記の通りです。予約電話をしてから〈ルーム和敬〉にお越し下さい。

電話 075-252-1771  
 相談日 毎週 火曜日 金曜日  
 時間 午前10:00～午後9:00  
 費用 1時間 2500円

無料電話相談日

毎月第4土曜日午前10:00～午後8:00

## 女性のカウンセリング 〈ルーム和敬〉

〒602 京都市上京区相国寺北門前下之町703  
 社会福祉法人衆善会 和敬学園隣

連  
載

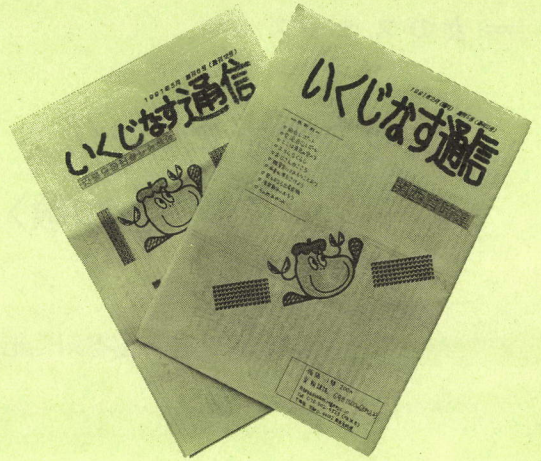
## ミニコミの女たち

## 第36回

## &lt;いくじなす通信&gt;

関西育時連

味沢 道明



ミニコミの女たちってコラムだけど、いくじれんは性別不可、男も女もいます。もちろんシングルもベアも。ま、多様なライフスタイルを認めあって、自由にたのしく暮らそうじゃないの、というのが活動の理念。いくじれんと書いても良く判らないけれど、正しくは、『男も女も育児時間を！ 関西育時連』となります。元祖の育時連が東京で活動を始めてもう十二年程、関西でも二年半前のアグネス論争関西版の時に、元祖の呼びかけで関西版育時連を発足させたというわけです。

よく育児連と誤って書かれる場合があるのだけど、育児連と書くと育児専門のグループみたいなので育時連としています。もちろん育児も大切で、活動の根幹ですが、人が幸せにくらすには社会の様々な問題を改める必要があるはず。性差別、民族差別、南北問題等々、ほんとにイヤになるくらいの問題をかかえ込んだ私達の社会です。又、その問題がちっとも良い方向に進んでいないというのも事実。で、こうした社会に対し問題アリと意思表示する時に、ともすれば肩に力を入れて、カタイ運動をはじめてしまいがち、もちろんそれはそれでひとつのインパクトにはなるけれど、実際に社会を変えてゆくには少々無理があるんじゃないかしらん。というわけで、いくじれんはウンドーもくらしもたのしくオモシロく、を活動の原点にしています。だれもが自由に参加して自らのくらしのなかからの世の中を変えてゆこうよという

方法です。

具体的活動内容は、年四回の通信発行と、例会やイベント、メーデービラまき等々です。通信は「いくじなす通信」A3の5枚という郵送72円の限界量。編集方針も基準もなし、書きたい人が書きたいことを書く、紙上論争型です。男と女の問題や教育現場の事、消費水準を下げる、等々執筆者の数だけ内容もアレコレ限界なく節操もなし。定期購読者は全国で百数十名程。このごろはあちこちから読者の便りも届き、編集にも熱がこもります。

最近では育児休業法が行政サイドから作られようとしています。これも私達働く者くらす者がしっかり監督しなければ、均等法のようにかえって弱者によりキビシイ制度になってしまいます。働く事は美德でも義務でもありません。それぞれが幸福になるための手段であり権利です。家事育児や日々のくらしを楽しみながら働くことができない今の経済のあり方、社会のしくみこそ変えなければなりません。そのために、ささやかながらも、たのしく気長に活動しています、いくじれんです。

連絡先 〒607 京都市山科区西野八幡田町15-20

味沢道明方

関西育時連

Tel 075-502-4853

通信購読料 6期分 1,500円

※松香堂で扱っています。(一部 200円)

## 現在ウイメンズ ブックストアで扱っているミニコミ

(第38号発行後に入荷したもの)

- 「れ組通信 No. 47—特集 共同生活ほか」  
れ組スタジオ東京 1991年2月 400円
- 「れ組通信 No. 48—君は「白鳥」になりたくないかほか」  
1991年3月 400円
- 「れ組通信 No. 49—自分運動と社会運動ほか」  
1991年4月 400円
- 「新しい家庭科 We 4月号—特集 「教師」という仮面を脱ぐ」  
1991年3月 580円
- 「新しい家庭科 We 5月号—特集 少年・少女の現在」  
1991年4月 580円
- 「婦人通信 3月号—職場における民主主義ほか」  
日本婦人団体連合会 1991年3月 250円
- 「婦人通信 4月号—春・結婚ほか」 1991年4月 250円
- 「婦人通信 5月号—女性の単身赴任—研究者、公務員、会社員、医師、労組役員 ほか」 1991年5月 250円
- 「婦人通信 2月号—No! セクシャルハラスメント 福岡裁判ほか」 社会主義婦人会議 1991年2月 300円
- 「婦人通信 3月号—中東、湾岸戦争 教師から、中学生から」 1991年3月 300円
- 「婦人通信 4月号—3・8 国際女性デー様々な取り組みほか」 1991年4月 300円
- 「行動する女 No. 51—宝井琴桜さん独演会「のこった残った夢物語」ほか」  
行動する女たちの会 1991年2月 200円
- 「行動する女 No. 52—セクシャルハラスメントをなくすためにほか」 1991年3月 200円
- 「わいふ No. 229—特集 私の職業人生」  
1991年5月 460円
- 「これからは別姓結婚 Vol. 4—いろんな関係」  
結婚改姓を考える会 1991年3月 400円
- 「それいゆ 6号—特集：「それいゆ」の10年～出会いを重ねて」 女性問題懇話会 1991年3月 500円
- 「きみには関係ないことか 戦争と平和を考えるための子どもの本 1991」 京都家庭文庫地域文庫連絡会  
1991年4月 500円
- 「月刊家族62号—月刊家族五周年企画・美のくさりほか」 家族社 1991年4月 300円
- 「月刊家族63号—女性とストレス」 1991年5月 300円
- 「月刊ちいきとうそう4月号—特集 原発いらなくらしを求めて」 ロンナンテ社 1991年4月 700円
- 「Fifty : Fifty Vol. 7—特集 女と男と性と生」  
スペースT・M・K 1991年3月 330円
- 「女性まちづくり通信 No. 16—環境にやさしい洗濯やゴミ分別は「主婦の仕事」か!ほか」 1991年春 100円
- 「女性空間 8号—特集 女性と政治」  
日仏女性資料センター 1991年3月 800円
- 「シングلز・ネット創刊号—カップルよりもいい関係?ほか」 確信犯?シングルの会 1990年10月 200円
- 「シングلز・ネット第2号—愛すればこそシングル!ほか」 1990年12月 200円
- 「シングلز・ネット第3・4号—分科会 いよいよ活動!ほか」 1991年3月 200円
- 「私たちは忘れない 朝鮮人従軍慰安婦」  
従軍慰安婦問題を考える在日同胞女性の会(仮称)  
1991年3月 500円
- 「三井マリ子の視点—議会活動の報告②」  
女性と政治研究センター 1991年3月 1000円
- 「いくじなす通信創刊5号—組合レポートほか」  
関西育時連 1991年2月 200円
- 「日米女性ジャーナル No. 9—指導者としての女性についてほか」 日米女性センター 1991年3月 2300円
- 「プロシューム 3月号—小特集 ストレス時代の子育て」 シーアンドシー 1991年3月 330円
- 「プロシューム 4月号—特集 今月の食卓」  
1991年4月 330円
- 「プロシューム 5月号—創刊二周年記念特集 プロシューム・HOT VOICE」 1991年5月 330円
- 「シネマジャーナル Vol. 18—特集 1990年BEST10」  
テス企画 1991年3・5月 500円

## — 書 評 —

## 『紫式部のメッセージ』



駒尺喜美 著

朝日選書  
960円(税込)

久々に“目からウロコ”を楽しんだ。今まで『源氏物語』が好きというと、「女を渡り歩く強姦男のどこがいいのよ」とか、「天皇制を賛美するの?」とか、分が悪かった。「いや、あれは女の一生のオムニバスで、女の生き方が主題や」「時代の制約を考慮してよ」と反論してたが、いやあ、これでりっぱに応戦できる。

紫式部はフェミニストなのだ。しかも共に身をよせ心をよせるレズビアンなのだ。

駒尺さん曰く「紫式部のメッセージとは、恋愛幻想、結婚幻想、対幻想(最近の言い方なら強制異性愛幻想)をあばくことであり、女と男が主観的に愛し合っている、男女が分断されてる社会構造と文化形態、生活様式の中では、どうしてもなくいちがってしまうことを描き切っている」。

うーん、納得。目からウロコ。『源氏物語』の世界が、実にハッキリ、クッキリ、スッキリ見えてくる。実は私は『源氏物語』が好きといっても、与謝野晶子の現代語訳と、田辺聖子著『新源氏物語』を読んだくらいで、古文の方はいわゆる「須磨がえり」という怠け者である。そのかわりというか、若城希伊子、尾崎左永子、円地文子さんらが書いた源氏物語の女たちの解説書やエッセイは10冊以上読んでいます。しかも独自の試み(?)として、女主人公一人一人の血液型、俳優の割り振りまで考えた。例えば、紫上はAB型、吉永小百合がぴったりという具合に。

こういう恣意的な楽しみ方をしてきた私としては、解説書やエッセイが今いち不満だった。玉鬘——自我を生きた女——、空蟬——なよたけのような女——(若城著『源氏物語の女』より)。ちがう、ちがう。フェミニズムの視点からの「見なおし」が必要やなあと思っていた。

そこにこの本の登場である。本当に駒尺さんはすごい。一頁、一頁、もっともなことだらけでうなりながら読んだ。読めば読むほど、紫式部のメッセージに得心がいく。

こういうメッセージが隠されているからこそ、女たちは『源氏物語』が好きなのだ。そして男たちがめったに読まない理由もわかる。忙しくて読む暇がないんじゃない、わからないから読まないのだから。同じ立場の女には、痛いほどわかる女主人公の嘆きが、男に通じない。光源氏には通じないのだ。

フェミニズムで見なおすと、なんと物がよく見えるのだらうと、快感が味わえる一冊だ。

小川真知子(メディアの中の性差別)

上記の書評欄へ投稿をお待ちしています。

女性目で見直した鋭い批評や、視点を変えたユニークなものをお寄せください。

400字詰原稿用紙に2枚、800字前後です。住所とお名前、電話番号も原稿用紙にお書き添えください。掲載させて頂いた方には薄々謝、進呈致します。

「あなたの情報・私の情報」とコラム「私の出会った本」をあなたの主張、伝えたいこと、知って欲しい本、御意見等に御利用ください。600字以内。住所とお名前、電話番号を原稿用紙にお忘れなく。但しこの欄は申しわけありませんが薄々謝も差し上げられませんので念のため。誌面の都合で短くすることがあります。

宛先は 602 京都市上京区下立売通西洞院西入松香堂書店「ウイメンズ ブックス係」です。上記両方とも次号の締切りは 1991年7月20日。

## 編集室から

◎1.57—出生率低下に関連して、本号では「母」をキーワードに特集を組んでみました。女性の生き方の多様化により、自己完結型の「個」志向が高まり、「子もち女」は増々シンドクになりそうです。「育児休業法」が骨抜きにならぬようウォッチしてきたいものです。

◎『母という経験』(宮迫千鶴 平凡社)は味わい深い一冊です。「自立から受容へ」という副題のもつ意味に魅かれました。

◎松香堂書店より『わたちの世界文学—ぬりかえられた女性像』が近刊! 関西の女性研究者たちの力作です。ご期待下さい。

◎次号は8月25日発行の予定です。

(木下明美)